あ[illegible]

12
881
47

紅梅　匂宮並

巻の名詞にとりて名とせる也　それ故此巻には按察使大納言
紅梅を折りて匂兵部卿宮に奉り事をよむによりて此
名ともなりたるなるべし　又 此詞(テツ)にて巻(ス)の名(ト)とす匂宮もこの巻にて薫
宰相中将と見えしゆゑに十九歳此正月のことを語れり
此巻にみえし源中納言といふは同十九歳の秋也故に竹河の
並(ナラビ)也　又宇治の八の宮の御事をよそへて語る事このまゝに
まりみてをりても椎本(シヒガモト)也同時なるべし　しかるに
紅梅此竹河(カワ)勘物何此巻にあれ紅梅を折て匂兵部卿宮にまゐ
らせたることあり紅梅の巻の今の紅梅匂宮の事と
当時の事ゆゑみえなるを　弁　此巻は八の宮の並也　巻の事
ありと匂宮巻にも当時の事みえあらぬよし
巻の次第にてちぬ大納言とはゆかりの事あり此大臣の二郎也

うきおほひあし遠の御書はさしはなちてつかはさるゝ

是は後仕のおとゝの息柏木遠の御書れ今年月あり浅茅宮
の時を年少将ふくてる後をとくらひ老よりかしく人也故
秋と名梅大臣と号せるや此集の奉は右大臣より任
を同時に夕霧左大将を兼中将中納言になり給
なり是を竹河の巻には椎本れ巻ふも同時也別に給
ふ 河此巻比の詞諸人不審之第二心にも椿姫集の始に書
此詞やうをとまつるゝ竹河の名に同詞と志せん為也
薫中将と源中納言と申す事 竹河の椎本の林 中納言なり結と 是又
宮八宮の姫君を尋給ふとに申す事あや奥にみえたり
下旨絵此集の宇治の橋姫椎本総角同時也此集にある椿
寒大納言傳りしてをも竹河巻と並の二をも兒
かくし薫中将竹河にては四位侍従中央宰相縁に中
納言や此集に源中納言とありてこれは竹河の比を
こゆるに又竹河の末より椎寒大納言右大臣になる宮に
八又椎寒大納言と云り下絵此巻ハ竹河の中央になる
ものなりと

薫かくしうもやられる心を人物し給ひし人かく
上臈しさや一本つまやうくくさとけり同人なるへし
ありのわさ給ふ年月り中つくまかそていとよしあるひ
ありかうさほしうまてあゝし侍おほしいと重んずとありき
ありかのくさるを御挿し竹ひしとまとうみの八すくあり
給ふく ありのかひき給 宮仕ともつくらし給る也
今ものし給ふ中をのちの竹侍さおもて此所むをあまた人
らうれせるくくまち給ひし元子
おそく八難星のこと物語の中にも大臣まで此とありき

政大臣の事ハ見えし係當代今上の御ちゝにおはしますを
ありし初巻より数年ありてうせられたる中にハ太政大臣
になり給へし後の御頃ほひにおほくやいかて致仕の御と
との後見されたる此の給へし　河野太政大臣　鬢黒大臣一名也
雙岡大臣夏野は一名を野臣と号すとも成親の後太
政大臣今上の御世太政大臣二人也致仕大臣　若菜上任　若菜下致仕
鬢黒大臣任紅梅巻也仍後に云致又此ち此物語の中に太政
大臣二人也引入大臣二条太政大臣六条院致仕大臣鬢黒大臣也
其中仍ても後也古と集り忠仁公とさたの御代より始れ
まうちきミやうあるは前官の名あるにも准后の
此太政大臣唯二人あり仍路ホ辞官前後の中也若此お
の後見とも同素寂云野臣の字へもとにおはしつれさうの
まやさるれと近代の出りしきを給へ行成卿

乃中ニ御子となりまうさせ給ひて後に大將となり給ひき云々
花　大臣清原夏野公舎人親王の孫也号雙岡大臣又号
野路大臣並岡ハ仁和寺辺あり後嵯峨野の路あるによりて
て野路といふなるやらん　耕　鬢黒後の服を自也と
式部卿宮みな古き卿宮のみにおはしますをなりの給へるにもあらしと見
こうを給へらのち思ひてかうひ給ひしことを月おもはれ
えさしもえたるを給ハぬなめり　式部卿宮ハ紫上の父也
紫上の方の母とも云へるとや北の方の女にも大臣の姫君なとハ北
父式部卿宮の方にて源氏の舎弟蛍兵部卿宮の御子也何とを
やさましや蛍の御子なるを給へる按察大納言思ひ
こゝのひ給へり兵部卿宮逝去のこと宮にもめでたく
乎　耕　蛍に給ひしが幼少の此巻と此間十
七八年也其中にあまたの人うせ給へし葵の年よく

みゆきとのことゝいへるやうに
源氏のきみれは服すとて二人のこ悲たりしかれハはゝくし
とて神仏にいのりて今の源氏の母我とおとゝの君ひとりもあり
藤つほの女御の源氏をこそ女の君ひとりおはしけれ
紅梅の大臣おのわかれの服りはじめとて二人いて桜狩の
服は男一人ひたし宮のわかれの時のむすめを治一人頂き
見ゆるとも白梅大臣のもとへ使ひやはりてやや
む桜狩の君宮のまつり奥し給し時女房一人まゐり
つりほり白宮のこと消して給ふしかしたりし紅梅の大
臣まそひ給てさし給ふ服りおとゝの君一人まいり藤給とかん
えたるやうに
うるそてわかをていふぞとを桜すしきと云ひかりし给へつるを
ま来桜の君僧まくそゝと我ほかれやかまに庭にあつう

ひ給や
とのゝ源氏の君あまたをよう給ひしとあらぬ心かへらちはし
つきおさまくめくしまふとも心てに源とたくに逢とき見
くさいてえ逢くしのこいまゐらせなたゞへみてはさまくなり侍し
かの源のと出さくるしろへさまとともなくしつたにさて心し
やひめそし給へえてめくうしあめやもとくるさおりえ逢お
あらほどに　大臣乃君れはむすめのちとまかつきなまつ
人あきハ今の姓母の事をとりていひ出ることともあまで
さるぬれにまてあしてかのへかなつるひ給とや或老婆
しきおつるるまといへともよくとなもあるしきあをくし
給とや
あれくやとあるひ給ぬ逢えは昔なるところをなかにたまふ　あれく
七ゝんの王ん度ひろく杉根よにはくるまく

つぎ／＼とつゞき也
南おもてに大納言殿おはしはにしに中の君ひんがしに宮
の御かたをすませたてまつり給へり　大納言殿の御かたハ大君とハ
紅梅大臣の嫡女也中の君とハ其妹也西に住給ふ也
宮の御かたとハ蛍兵部卿乃御子也此君ハ東に住給ふ也
紅梅乃大臣の君めハ絶子也
大夫ようちをし前となもちて宮乃おぼえをねんごろにきこえやう
なれどこなたの御かたへはたえて御こゝろにも内く
のきしおよび給ふとも御くらべきこえさせ給はて
よ宮くみて宮のこゝろ也又宮乃御かたハ人ちかう
も御まへにて此とをなく可思しめしてぞ御をも
とや宮君乃事也
事のひゞきりてまゐるを　蛍兵部卿乃御子乃もとる

弟みたり君乃事也見てたち何
是ハのちは給ふ宮にあるべくつき／＼にまさりつゝ
御人柱のく　見ゆるとハ地乃子とうふあらとも御親ハ
あつまりて飛うしつき給へ寸婿人の事仍りきれいふと
色好乃きや
うち春宮よう往久しくおあまと　内とをそ当今とも上の居
るゝや春宮ハ御兄中宮乃一の御子にはらるや
うちあへ中宮わりし此御いきう人々の彼はもそう
すあらひ寄ちらそうひ坤とうさもきせんとひあう
宮へし　御兄中宮や此乃御おほきをどうちも大君とそ条
らせりしまとの御也
春宮り人大度の女御あり姫人あそひく給つの御ふ
八さしうひ多くわれとさのくひくやくへくまたまらんと思

ぬ女子と宮ほうくにむひゆきし。あんたうにの明ハうそおもんとお
ほしたちゝく　夕霧の嫡女乃おもくしまほ也
東宮をまうける十七八乃ほとよりくうけみるにひかれは
名のうち給へり　紅梅大臣の嫡女を春宮へまゐらせ給へり
参らせ給也
中の君をもうちまかりひくわかしきおかゆきしつゝきかへ
尚さまにまさらせ給しうれしきもれたきなくんすく八の宮
しくを見をはうきさほとさすを　うちまかりひく　ときを
ひくや御事くわかやうちつきての心すゝへし
まつ宮の中をも心ほしきへるとおほしたり
白宮の御かや
此君をとうちかへるに見つゝ給ふとの後めしまつり
そのつれくるよみし給んとへ者く　神にまかせ桂宮乃
ちうに出来る紅梅大臣の息乃事也大内卿くき按察
上みて君給をと白宮の御後し給めしまつり給とや
かくなしたつりかくまつりひはさまり　生長きる
後乃事とあり
せうとを見くくのこをいゝ中まし也大納言りりをよみちを
の給ひくるを　白宮の御也兄弟の君なちら給を
見くく中君をとわるすをとりむまつしさかいつ給を
文大納言あり中せとの御也
さちんとうとゆきハうちさりていとうひはうとおほしたた
ま　文大納言よ白宮の乃給ふととも有のまうにみ君の
ききれしや
人をおさへん君はへ入りハこれさめりよ給しらんか女子を
見をなかくまほしくれんのゆくいまうりきつくしきてや

なりんは今上の御母入道の宮にならせ給ふとの給ひなりしかは
中々かやうなるきさきは禁中のさまなるよしなり白字八寸
給ふとおほしめしける也
まつ春宮の御事をとりあはせ給ひて
ゐたまひなんとする所なり　大后とはいつつ
とられ給ふといふは國々の源也物語の中に此事おほし
春日の神の御心にもかなはぬにやとおもひて
后の宮に立給ひし藤家ならて立給はぬを源氏なからも
立給ひしにと此大臣をおもはして春宮へまいらせて后になると
此事給ひて春日明神もとかめ給はむとおほしめさ
まんと也　天照大神とは日神なりとて春日明神をも
神の御うちにへ給ふはとて日神に対し后とても神
の御ころに后は藤家ならて立給ふや又后

の御神代よりさたまる也秋好の中宮の立給ひし時も彼
此の大臣の事との給ふ事なとして伊勢の御やかり
給ひ殿とて内宮の中にありこれを春日明神を勧請
しまゐらせやまるへし春日の御を摂政としてあり又天
照大神と勧請せらるゝ也伊勢春日は他なり異なるを
いみしう氏の神也　花　源氏なからも立后なる事は
如来若菜下にたまはるしおりの春日大明神の御所
のゝ御ゆへは朱雀院御宇長暦二年四月春日明神託
宣云神宮斎宮幣不清浄仮非藤氏皇后也依之
内大臣教通公の一女可入内之由託宣下之長暦二年十二月
内大臣女真子入内為女御今案長暦の所ハ物語以後の
ことなれは物語のさたする事とおほすなり
なく侍るへきのゝとはいはるゝかやうなんとこと

こきてんの院の女御は院すともおほくおほしめしいたし
なくさめはつまもおはしまさんとこのうちに御てならひなきま
里におはしますと時めかしおはしませはうしくらゐのほとにまします
の大きみおほとのにはしたなくしきこえしろしめすまゝに
くもりて　ち致仕の大臣の御むすめ冷泉院の女御にて
弘徽殿とかやて梅壺はおはしましけれはあなかちにおほき
きさきにて中宮もあき給ひぬるをおそれはおほして
くらひ給ひしにと殿上よりも女御に参りて内よりもと
いてき給ひて御はらにてくさきこえ給ふをやくそん
とのおほいとのゝ心あるへし
かのくらひくらゐより給ふにはまさりたまふやうにおもひておほ
きひとつさしろく申し給ふ　大君をとは小君のお
ほく継母(ケイボ)なれともまことの子のやうに思ひたまひて

内侍のかみにそなへまゐり給ふとそ
殿上はましくたまふこそちしかは　大臣は小君は内侍の
蔵人(ルス)なとさもしおとゝのんとも
かの御かたはひとりよろこひ給ふことゝなりくしくなつ
め給ふ　中の君の御ゆかりや宮の御かたの南の御かたより
はなれひしやうまて立離(タチハキ)給ひて宮の御かたにとさまく
しきこえもかの御ありさまのちかくおほきに
あんなる姫君とも又かくしきかたにて給はれまてなん給ひて
よろしくはひとつにおはしまさむとの給ひけるのまさる
ひとつにおはしまさんとおほす　まへの宮の御方に見女也
この宮は今上と后の御むすめと申すそうしろしきに一
品にて輝(コキ)ちゝにもとも宮の御かたを御やうにおほしくひ
給ふとそ

こなたさまのやうにいひなしてそ　源氏とは申なれ
桐壺の御のやうにあしひ給ふも或本まことあるよし
やうにやあらん又一本は思ひやらにとありいかゝ
されともあしひけてひ給ふなり　連枝の中に此ことをこり
ゆくちとよのつあらそもし給ひて母かくのことにしたかふさやう
みえたさくしもひたすら給ひもかなしとおもふまてなと
てなし給ふ御からし心なくまにんのもとはれ給はりたまふ
まさあいさやうつき給ふるすこしくまうともくれ給へり
宮乃御のときをこり
おくうちゑうやまかやとかうかきはてとのことをひけく
やうなるも心く給ふなと相しこ申　御大の口やある
むもとめへ内なるとをうちおもうひとく源氏とをおもとへ
ぬやうなれともめにおもふなと

はうへうんはさにおほしはしとめての給へわたるのしこと
此はへうりまつしめやそくさこにとなるつ給ふにやれと
源氏と給ふ人へきえんあるもつまやう給へとかりまて御大
の給ひや後これはて禁中にはて給ひ給ひなとの后富あ
のさまとも是は御大の御方へ連てやうなの給ひと見る
ゐし桐壺乃御かた思ひしてなを給ふしかん也
はしまさゆうなふつきたるさ宿にひなくへさはもかくぬ
なしおほわれ　かまれ夜なりや宮の御は夫婦の契りなる
とのさまをもてなさあるまじきへそとのん也
中くあるんなりはんくゑしうるへし　なましいのえんな
とはくはそくれんなるうらんとなる後也
源氏もくきにまうきこ申　夫婦の契りまにそうさまぬこと
の初なり

世にあらんかきりも八九年まんへ候て候はんとうろうかへきたれ
と　みかと此一類の後心にもとなきとや
世をそむくかたくかたもとのつらく人こそ入り
宮の君を我かかくしむ後を出家にするにてもとくさき
御えんかとや中々になるらんなをにも継母人かはら
たれなる事かあらんの母此心也
何事のまきまきるつきくかくたるく候へんなんるとうちなきに
て　人のあさくたかる人かくぬことゝなり
御心をも此子のやうあるおとなをそ中をし候か　三条の
君の人をあ大り御か諸給や家の候し給とみる
なし
いつきをもる候おやうちに候へと候へくしちを見えかとゆへ
う物候しかな　あ大の心をも家もしらぬ大の心をとめても文継

母の宮此君をもひとしをなけつひ候とや
ふくまつ候こ我か心をくれをも候ぬく人こそまつはか力を候ぬなし
やとのことまありけき候へとうちそて前かむきえとうしにくみ家
里給たの　宮の君此所にや
うなしおもきを御候をと云て　みかと入内のある所かるもとさう
たちくつゝうかも奈りくくさせとうとくしう　みかと此人
里にあ大の九く葉中家へお候をとられたるちゐ給へは
条のおもくさとのんや
おほし良く候たくしきなれてゆくく我かなると中なるてみると
のあ前りあるへくたにゆかくなりつ候とみ事
ちひなるとゆかにおほくしうちゐちひいかくあきて哀
ありおほゆる人のためありさ母なりわかれ心めなたちとく人ま
おとろしや　継父の心やうにはなるしらひ給とや

こひしかれと　おもふらんや
此君ハりこそもまさりてやあらん　宮の御方をお
大君の息女をも　よそふりけりとや
かくれたる世中此思ふ心ちハよそよりもあはれなるひめ
らしやおもひにほのかなることもとのつくりをめ人になりけると
大君の心ハ我むすめのよしの名のみ名をきのこす紀ハおもし
とりも飽かずほのかにも世中ハひろきことにちかくにさへ家
の君ハはやうもれむすめをもうちこゑあらしとや思ひけ
え世よハ斜してまつりしさもめでたき様むすめとなりに
ひとつかなしてもひやかし給ふ　大君の心ハ表鏡(ヒャウキャウ)へ大君
をとしそきて隨縁(ズイエン)とさへともさはりなる事のまたさ家人
かくるしてとされ給はんかとおもふ心にあまる紀とや
見給ふにとなく物さかしくもすすめ給ひたるとのおもてをうらみたい

き給ひて　ゑさしうあり給ひたるなり　大君の詞也
前后も苦からじとなり
かくれて人給ふ人をひとりと心ひとつにまかせて給ふことをまねびし
とりもちへくや我身にし給ふらん　中君のことや
あはれなるものあらばそなたにかくこそは物の給ひくまりあるし
身ハ法にとゞめてなをしへさなきを給へ　琵琶の猶心なるハ更
みるに物我とや惣別(ソウベツ)ハ猶ゑこへきやうなれも法位
とゞめてたゞしき給へとの大君の心也
ねざされそとうたてかなしき物給ひて給ふしかなと
大君の家をすぐとなり
それからにゆるをまちし世にはなれひ給ひしかくりきなやしし
あはれなる此まゝにまうしてなんかくれていとはなきなり八給
らうたかりしを、ことそまてゑこいたりらる思ふ者と　源氏抄

仕乃大臣なとの基也此時乃ことをいへり
こまかなるをは此まさま人ハ　卑下(ヒゲ)していふ也
弁 伯牙(ハクガ)か心をもいへり
とにかくうちあはせたる物と此琴なれは　宮乃御方の琵琶也
琴(コト)なり
むかし物を得たる古六条院の御方ハなく　蛍兵部卿宮ハ
又琵琶の上手なりしまゝ撥音(バチ)にかへるを也
息女乃ゆへ也
右(玄)のおとゝ御こゝろえにのこる事を行へる
琵琶ハ源氏の撥音ののこりたる也大将と右大臣ハ　夕霧乃琵琶
兵部卿の代勘にいかゝ(イカヽ)も見えたる也
源中納言と云事也宮ハ何事も上手にて此人をおとらせまう
いとけなきをことにまうしあへて今ハなくさめものゝ給ふ也

とゝまりて心とゝめ給へるを　薫中納言此ほとはしめ
ハ弟乃君なり我ハ宮と薫とあはする也薫ハ源氏なると
云ともおとらぬ也何とあらはとゝめ給ふにや又薫
中納言乃まつしく行給ふ事(全)ハ又はあはれにて梅を大臣
を催給はすとて候の内にいまて大納言とのことまり
又推して此中将なとものしたる日宮をまつり撥あま
て又巻〻混乱(ミダ)せるとあり浸(シル)きり
てはちひさくしなからそへなとるとなん
なまめかしさはいかゝおもえなんや以乃絹にあらためしうつ
くしからん女の手ことかく中にも　いはれたる事也
あり心にくし
おとゝにもとはせ給ひしこと云々給へるを　夕霧此大臣
みえ彼女人ハ反行ハ女なるへし

このほかこと此書に載べくおほく侍れ　宮のほかに此
撥(ハチ)をとり夕霧此まで見ゆるとも琵琶をとりて小くり撥とハ撥
名(ミヤウ)也
ひとつ残りして声つやゝかれ哀をとゞまるに物なるにちうきに
ほとさうちをとりかさうつきて后きさめうしきへのしたうかに
む女のほかにほく中にわくしうりあるにて御そへさんやほ
ことまのれとの給ふ　たのもふくそしつたまちりあう
かく数ありおもしろき書乃絹(キヌ)物也そまをとちうさもと
云う　女の師おしえふく　女あそ似合ぬやさしきれも
又おもしろき物とも也又此義ハおほ此詞ふくてはるハまこと
しきをむたるとおぼえ人の撥書うつりたとしへりけて
女のことふくハ律よくぬ撥書ハ中くおもしきことしるゆ也
女房るおとえかくまし在るもおさうりしとわつき上臈た

川かたへしまゐらせしとおもふハしきこゝろうりまかせて　女房の
ほかにも此女房なるとハさみこかくまじぬとも今まいるともそ中
よわき上臈方をいふくれ給ふを御大乃宮方をそ見へし
給ひけるとも上臈部さ人ゝくれ給ふそへしきを云給ふとも
わかれなる方ゆく数人さ人ゝくまてあまたりやもうくぬとも
云給ふ　上臈たち前ゝにも御大よくくれきまじえしとたか
くまでんとまゐるに女風(フウ)御大のるよ給へまじハ心あるとま
くさにおゝるに見へしなるとのかも
わか君うらへ参らんと殿井をとりこふくまゐ給へる
御大の息也敷殿上し給ふ也禁中へ参り給ふハ父の家乃
君此かるにおうしまゐをえわかる給ふ也
わきとう給ひしなまみつゝまりもいとおかしき見へるていつ
しく　殿上童(テンシヤウワラハ)ハ束帯(ソクタイ)の時総角(ソウカク)(アゲマキ)もこゝれをとうつしもと云

このおもむきは通夜をとり手向の時に弔ひをも
まうさるゝかくるや
うけたまはりしなるも　又おほ大乃心也
延喜天暦の法と申守のしゆ　太つ弓の主宮寺
ゑんきいてゝハ行慶(ギャウケイ)と申也おさ経正大夫の
法事修(シユ)の給也　弁法とく八雲へのはしとゝ法で也ミと
ゆうの雲にてこゝのひとつゝのまつりもしもあまくるまんと
守しようとの給ふく節もとし法ゝまつれともも通ハ法のすへ
の法あらひとめし出しるくかさゝうゝけや　かうれ薬(ギヤウ)
新(シン)度まうひくましやにはゆかりて経大ハ心安(アン)くと参う
ぬるへしあ一見り小より中給へとや
まうさつとこれ節をとおまちて花さきうかちを給ふやうと
ねうしうしもい給へとも　あつ見の相也旨(シ)心大なるとの心也

まこうかあくをてあのゆく者とけゆるとにふくとのつゝしたる物ぞよ
何にも冷きをなすも　あ雨とふうくおゝるまたるるとやせむかさ
つもやをとも宮見ちゃく物ぞりりけるへもるゆへたとや経正相也
わくさをゆきを給へとせむかぞの給へたくるしやあ法し参る
らしまあり　あきの見り経大ふの給也
ほさびきたにゝとうくあるを立て　琵琶也曝(バクトツ)とけし
ていとるや又さのことにきゝくるをひつてそむかりをとるや
又兄さくともを梔(ユヒ)ハカリふくいをとふ花若するも不変(フヘン)也
琵琶(ヒワ)の弾きひかさ無何(ムカニ)とと
さてもとこうのたまふらいう給へ　あの見ろきさあつし給や
うえ色しんつくらしたるる色して花をんうしぬつさまのき
ちゝうきこゝもらいつとおりしこうくみちひかさをと見給くあまる
への文字んとへあうて見ゆるめるも　経大ふのうをを吹てく調(ニシ)

ふえはなしあはせてゐるやうつゝかとさゝめこと〳〵したる

るふとかなるをれたるうへは調練したる心也　河皮笛

嘯也　フツヽカトハフトレカ云心也　太フトレ　太笛フトフエ

よそも宮うちはおもひけるおり一枝折てまゐらせられ

白宮の御中におりしまゐらせ御梅を折てまゐらして

なりんとの御大将也

ゐるへきし給とて　白宮をまちしるくの給へり

古歌なとを書てひとつ見せん梅かえのとも〳〵も香くへき

かうまつる源氏とのゝ梅

いたりけれ大将なるとにおりきし給ひしはるやうにく

まし〳〵ひまれけるし給ひよとて御にかしうつれ

源氏の大将の御ふ御大のすゝしそふくましくひなり

しもかしなまとし給也

此宮たちを世人もいとさしもにほひ宮とはきこえしかと

此あたりの給へるこゝろをしたまひけれと　白薫なるをれてとなり

たゞしうちみえおほしたまひしほとひあはしとさへひ宮

さし　　たゞしかうし

　　　　　　　　蜻蛉の心も浅き心也此あへるを源

氏の射しいまは一向に御給ふるとの後も行ひたまへるとは

源氏の君給ふをいとの心也

心のうちはやさしんなるにいつこひ出たまふにしもあくはなか

色をおもしろきと　　人のこゝろはまえしくたる作也

あはれふかく人のとくまいまいりてひさしくらうしは思ひろきかれいのち

たるさまのしつきし給ひ世にかれなるをうちしてそれひく

まのかいをまいらにもとくさえひめく〳〵し

くみえて源氏はたまひなすあら人さいはれはまし〳〵めまち

御大の行ひくるこの給

くはれぬるへの今とまきありなれはたゝくるの御まいりたまはさんに

てハなしまよとや

忘られ給ひし　右大の若紫諸かくしまゐらせ給ふと也

律ハ今の世ひろくたすや花ちらせてハ花を乗らせ給

右大臣つゝまとりしは給ふく源氏のすゝめひ出る律弁

て世ひろく今白宮へ入梅をちらせてまかりけり也

若此無しさ法りてとに是此文をみせよとてハ　出り比

源氏の法師さうてハ白宮なり此縁也いかゞせんとハ無

しさんの切なる縁也

佛のかくれ給ひてのち法の師はなをおほくありとぞ聞えまゐらせんを

大論云釈迦佛入涅槃之後阿難登高座結集法蔵

之時其形如佛仍衆會疑佛再出給ふ上阿難来證四果

人也仍羅漢等不用之其時阿難自然現瑞

かしこひよそ給へるとなり　仏二度の出世と阿難を

さひさう此詞也

かしおこりてのおありけるとやらんまへとふ　羅漢以下の

一念の大事をいふり

ところをこえあり　仏乃別にやうたまをひしにと阿難乃説

法ありて一念此大事のかくをたゞゆきをたてるやいはくくむと此縁也

実のくさくをきんてしまて　白居か宮あをとるにてハおくり

さんのよしや源氏をみそ仏になるとへ白氏文をとそ阿難なり

ほとゝ入さうか入るみなるへし

色ありて風のみよりはみそれて梅にまかり亭のさらにや又大き

右大臣の風さ法をしあるにとの縁也まかり亭をいつる笠をとる

詩とのある縁有仏師説ハ詩んにて用也白氏文を詩歌するもの

河　先也又云詩也有説とめに悦衆に壱をささへる面観音の

んおさ吟詠をとこ　并詩と先んせ有縁也意なるへし

空くれ本井此くらにわかやくにくさて此君乃母ところかうに
とりまゐせとしそうらうてひらしたて給ふを　〔梅〕よ
御遊(サウヨウ)のらん也
おさたまりけるよ先かれ宮のうち侍しと思へとも始末まで参り給ひ
此君乃白宮(東宮)まいりたまひし事なりけりと也
中宮の御うへの御使がはするを院とのゝ御はかりにて給ふ御ことあり
御らん人あまさに御せうそこにて参るたまふにうつまで給ひて
御らん中宮の御局(ツボネ)より白宮れ我院とのゝ御はかりへまゐりて給ふよ
此君のまゐりあひ給ふとも
昨日ハかならぬもくならぬさうてけしからぬまつりのちつる事をとの給
白宮の御門也
とくさうてゆるめしくやしさにまうさ内々おゆりしまへらとも人
ゆふつまかはり君にまゐりつるやとおもさるきをなかみぬかうらす

遊宴の也　此君乃夜々会也
うちつくろひ給ふも院のあるも皆くさまこなたへうつしたる人
ともの数こそんくせとなくあめまうる院そとのゝ給ふ　白宮の
常(ツネ)にありしまへ二条院つとも皆くハ参り給へると也
此君めしたまちつかうくひ給へたく人くハちつくと参りしまて
白宮のこれお院へ此君をとうひのまゝく陽蜜(ヨミツ)しての事也
まゐりてちつまうるもしく御志めやくにたまりぬまをを
退出(タイシユツ)乃よしあり
東宮まてしいて夜もとくしゆかされたりそめのまふいとよまたう
知らりしきうつめりしとこれともまぐて人よりかへりまとの
給へ之　此大まての君をとま宮乃まつりし給ひしかあ心の女
御まと参りはしきいてと夜おりとや時どくまうであとハ大
史君ハ今時りあらぬとのらんや此君を大臣のもとよりもとう

まつえさま給ひし御とく給ひしかとも　大夫か詞也
王宮へまいりし給ハんとしさとや
おまへの御せとも宮もしさしあはせられて又これをいへまゐる
しらぬひとのあるもあらとりをちり　白宮ハ大夫か
参らすとれし也
わさとかへんとるとしと　白宮の詞也　我大夫を白宮と
云ひちられあるとの給也下れ御を我大の息女とこふく
懐くの給也
内しとゆをとうしもこそ　宮のうく句と切ぐ鮮とも也
申るめしさ給るしもちかくさんし此空中あるそれ
云ひ給そんやと思の御手かしひ守のしるとの給つゐて
り　かるめしさとちとハ玉鬘(?)のりとの給へり宮空寸
昭姫君もんうしく大僕給へをそましと白宮とあひさそん

と我大のみへて大夫君よの給也
此花をちまれもうちよこそ　むすとうろうらたとへ
世くてるる我也
らしかくく段あくあるしるとてうちもを内済しんもえ
るのちさ花あかさるめともよの日あくまて
うくこそ段　此詞引我前へし来覧ここ　但一字
と恨の段あくそりつるへんとやいまへきえハそろし
めるまれたらつり
恨くれ給さ人の住しくらわつひそてつ又ハかくるん
此引我のをあるぬやさまあたもん須く
世れよみ後つるくれ前并　此こりとくまてある(?)んしろさ
梅ふとを(?)と給るやいかめるを　世のよ白うつ　詞也
くれ本よめの事りしとくまて

引歌後撰拾遺　まとゐせしころよりも
我よりもまさるにほひや梅の花
いとしくうちとけしさまおもしろくてほのくゝる
とくめくりつるむすめなれて　此紅梅はちるをも見るへく
てさくくは咲たるとの紛も紅のいろふかゝりけり
ひあはれくもてなし給　白宮梅とこの君へなさるも
ちらひおとこの井あめりやそこそへたにとめしこのかみさまの
と兵部卿宮にもとめつるを　白宮の詞也大夫兵部卿
宮の御方紅井に来るをあはれ給也さる人としてこなた
したしめ給ふとも
花とをるしくみゆるへくゝうつして見給ふことわちくおもと
何つまとまるにこめゆる人ひたすくうつししとあつ
しうるひ字の也　白宮此御方つまれむもちうしくさ
大へさゐやおほ宮のん也

此花のあたりもちるとは見えすけうつるひ給はなりし
白宮此詞也兵部卿宮自身はなにとて兵部卿宮へ参
参給のおぼえは大夫殿にも給はす也
あるもんへのもとへは香とて見給しるきともちる也
大夫殿詞也またあるとありん母ちかくんあるへん
みとは白宮へ参給ひんとやらん所しとあるは此うへ
て参やも
打歌
同伝後集
わさら給はとも紅ちるしくも我まちんへのみるや
るもをしも此家宮の梅とてそゐまへんへは兄にあ
大納言此ちるへきわくさありまへんあれと
紅大の御中君の御子に白宮をおもふをまつらんと
ありとも白宮は宮此御子にとありし給とも
こく何のき給へとありに心をあとにあるまくぬまで

白宮の心ハ宮君とゝらひ行へし又のさくあるを語
色うしやらひ恋る語とも見ハ年にひて又一本秘りさ人
ありやらんへありとありさまて大納言乃紀をさゆうに
中あらを語へと白宮の心ハ宮君中と志る語とらやこ
この紀ある常(ツネ)に語ても人のくと中あらを語也へりあれあらくこ也
此理(コトハリ)を両白也又一本に父を中君を白宮りと思ふ
こと白宮の心に宮に中君のことを中あるを語へとも宮
君り深山の引とれよし気
此夜るのきさやうにもの語中しも津とめて此さこのまうけ
名にあるを心をたまるやうすく　白丈の手に中君れと
もとらひよると語やうあれとまをすく急(キツ)なる次のかえ
たく人大丈夫とあろとそ御る親とあるれやうに申夜
奉るらや

花ちるにほひもまた南へさわかるせハ風のをとをきくさまなるハ
白宮の心を果下(ヒ)ケの語つり白大よりと言ふと云り
行をと風の便りと云りそこらのまハあまたともわれ俱との
あはれえとらひ行そぬとも下の紀を中君へ心
紀をぬりへなるへし
さて宮様もそれとめにほひしせさせまいて思ひやりに
とぬくの語らく　白大の方りしもしに白宮君と白宮
出思ひやりに雲(ギキ)りてるを紀久りし語りんよし夜て
大丈夫の語中の語とも
此君とひんしれとらえ遠んことなくもてまいらせまし
たり　此君とハ大丈夫なりや白宮君とわりあ[illegible]たらよう
こと我のひましたる也　花　白宮ハ東の姫宮ととら
ひまし語とも云々

ゆくゑもしらぬ姫君ハ見へし給ひなとしてよその見ゆるうち
のうちきこえれとかくてこちにいとおほさるにうつくしまかり
うおもひの心ちへとのひたのミ侍りて見ゆるやとおもひ
わかなくに　色ハ大将君のんや本此兄弟のみとのくり給
果(カン)たちかたちさまも見えしるしるとハされとおはせくに
わくまのはしう宮ハ宮此君のこすとのこりうひあるさま
すゝなりつるしきふよとや
其君のおもくされいとむやくにまてあはし給ふにつきてある
しるすとそれにひあかゝりつとおもひそくちかしきれハ
麗景殿(レイケイテン)のうしはつきに給をと大将君見るにとひつまき
おもひしるすとハいひなかく物とまれなますとのやうに
なりしなをとおもくちゆしきとも
此君なとにあちく見まゐらせやとおもひあわくに

白雲なとしに宮見まちかく見ゆなかたきとや此君を
きこえとつゝ心より女御のしきてありしやさしけともとこそ
あはれなるにや
う給ひさ花のはなしてありきハこの世の浮くるとあれハきを
なきつ　此母きみをとすれつゝてあはれならん見ゆるも見せ給
きこえれとも彼月のなかくるすなれハきん父右大臣殿
せちかやハ大臣君のんや　右大臣の嗣や白宮の女房
給ふまとほとの給へるう那
のんなとあり
あまつさとも花あるうくにきこしめし給へるとゆるし世の中はと
世を終て左のおとくらくれかく見まゐるにハいと物あはれや侍
こゝろおさめ給ひて　おりしられ　白雲の殿もに
事なともりおのうくにあまつさにきこしめし給ハつ世をまな

よしを連〻(レン)くやせ少給て左乃おとゝ又ある人の心あまり
时にて白宮乃寂(レツ)人ハ世をさて給ふおもハへもおりしらぬ
の給夫乃心也左の御とくきこし多めるかも有とある本
左大臣なるへし
何さ人をせんまそらし給ふる内侍さしと志ゐらくま乃め也と
ち給ハんと思ふ心をくるすやもあらまほしきと
白宮好みこの人ハすしてハうちつち風流(フウリウ)よまし由きハそ
らひさう振(セイ)や中くよ寂人たてもとはくまち給へる詮
白氏がよしとあらし給ふんうとや
河 佞人(ネイジン) 日本紀 越人 孟子 佞心(アタヒコヽロ) 日本紀 異意(アタシコヽロ) 万葉
志つめまいらせて今も未世給へる文
河 讒言(ザンゲンコト) 今も未世給へ 白宮好み世にあらせ給ふの給也
大臣へ見へ白氏文へ未給也
をとつ者れかかへる思ひす神かまとハ給ふともえすゝめまをやち給ふ

ある大寺 白宮ハ振かまち白源氏神よころのとりあれ
を中井をとむりきんへ一両目まてまへとさやらえ
あしぬるとやらしきんと云ひ世人めん情くらしきる
とさそんとのんたるへし
をかうしやはあうしこ也まあめやうに中寺と給へり
ある大のうさまを也うやうとまるつくむるそてやかあまう
にあるしけたま給とくや
さらとにいひあさんとさてか而宿かやとさすんにきんとれ先へ
さし給て 白宮乃ゐや色をりすまにの給めまとち志寂(シンレツ)ま
いひあさんをと神ふとふあめれし給とも也
花乃寄と白氏の宿まとあゆるいうかめうとやへのとうれむ
白宮の夜心ハ人まれもの子わらく宿を尽給ともにもすめ
あまとに寿さうれんまてうよりうと人のとうめんとも也

あと頼んで力をつくし給ふるとも中々しとおもひわび給へり
白女の宮中し給ひ時なともあるを君の心中さし
さとや　并　君たちんと思ひとくく
此のくまりて行てうちよそよそとれとの給ひは申つくに
藤原殿より君大臣の中宮通也
君の一代とのおもしてそなたを出でたりし白ひの所とおもう
かなしきと　大臣君白宮りをまゐらせしなりや
人を頼と思ひしを　人は藤原殿の御自ひと思ひしとや
されど是は白宮の御方なり申給也　む人をあまた
君乃御白宮と思ひしや又は春宮の御事也
宮は此とおもわかりけるを此年々宮よそつき出てに申り
又とは春宮の御事なりや是は大臣君の自りあつ給白
宮のかうりあるとも人のやうし給ふとや

大臣通をはもさあまり家と　是は此まれ君大臣なりいなと
桐壺也大臣君と云宮人を申すとのおもり申して白女ま
と行ふるとう中の事みつくちうめして春宮女とは
大臣君のすさめかね妹を頼給ひとのんや又一番むへき
まとどとありその通ても是を出あるをとりあそとの法
四月の子とも五ささむつ八月の字也あまた人のま用さらるる
稀なり
かくおどろきそへ給へりしにて如くしるへり
東宮此大臣君のまゐしきとそとをさそうし給ふしと
をかぐやを行也
かく御せそくや御身しさも見たく出りしそとの給へる
是も此まれ桐也白宮より学文やさしとや云あるに
八月日八月のうるしと自向自答し給へるや御座をなる

これハ宮の花の浄うる人乃ゐるや
なりし梅むめて詠花なれて　紅大乃綱也　白うめの句なり
をいへり
あらされ浄さの紅梅さくらもありしとそなへて折り
みなまれなりし　花も宮の花のさま詠東乃浄ぎれ紅
梅たるへし
う浄のもまへ八あまふてそんなともなれ　白うめれ浄うつりまの
大実花またそたる八微りいのとたま詠と紅梅の詠也
されましくひ詠たん女ちるとはさえうしめぬ乃姉
禁中なるにも文浄ふ女なるとも白宮浄とふえうえを
ここしめぬとや
源中納言ハうう浄さにこのましう花ゐまよみかふきそへん
うう浄て世まなまされ名ゐしうえん乃世れ恭りつうなりあらむ

くひなりと梅うしさむしにしてある　源中納言の
蕙乃つるや白宮のやうに焼八志ゐ詠の実ともしも生詠とも
の白詠ともやんへうて其世になれすて奇(キ)特(ドク)なれ白さ
へ人世乃むくひなりやうなりはゆうしふとの紅大乃綱也
ゆるし花の紅なれともむかしいひ出てらん詠しても大なれ
花ハあまくにほひとも梅ハ生詠のかなひとまていふも
のなれともぞ梅う招(ネ)きそくの初とや白宮又蕙ちとし梅
りをもくへみ下絵してれかうに風流なることを招
あれ源氏乃奇特なまし其一詠ちなるゆへなるか
なる趣ともち詠とのこゝや　花　梅ハ招なるともかし
さ花や尾とを源中納言そいりなるもむかしきとかう
ちしきは白宮なき人なるや　并　白蕙の天性(セイ)
の奇特なるとも云ひすりも花の精(セイ)性(ジヤウ)も批判なるや又

薫の君また薫と称するは梅といふにつきたるものと
此宮ありしよりてめでたる事おほかりしを花なりしよりなく也と、
まいりを申し給ふ　白宮あたりのやうに寄特あるをも源氏
の御縁なるれハ匂猗えうしよも花なりしより出来てをも某源氏
の御事をとり出て白大内の給ふとも
又此源氏は梅花ある月まに猶ひきまゐる也所へ書ハ付ます
とて見りをも申しくめ給ふ女み又あらねとなみしより出来ぬを
らんありたる事をさし所をも梅月しをも朝臣をたてを
宮も此源氏也
世のんをも明にまうしありてもやや　申上れんをまいり付をか
なをとかく清くく乃むをめれにひょう梅花とも
たのむにひたる清くてみえ心をはなくし、女申ものしまむ今め
うしもさこともおほんをもと　二親ある中一思れ事にをハ傳と

まうと縁のうすをやせともこゝ見えの傳もするをはらひにより給
くことちるぬとも也
こゝろくにより給いりつき梅しめやうにおもさうり給へるを
宮の見え此源氏かくハ美志めやうにいりめにおもりしまれとも也
又世に源氏女中さひのうへにてく清て人給ふ　かうくひそてと梅か
しあらりに帝のも　祥乃字んによりける空の餘也白宮にも
見えあるひたる也ものみ給ん也時の人を白大内客すとのを
まてありける御縁なる白乃法んありへし
かつ見えとも常に申つりしるも給つて思ひやくに清く文あまと
大丈見えて宮見え乃清かく人常に白文あるまゝ文とはかれ
しおとも
大綱を乃見え帝にくいりを申し給くちもしひたちらくの給す
あらいとくしなとこゝろをまさきし給ふを見えるに

おほ人のくるまに中将をと白きある人とゆゑにこゝろくへ白きあるよしと
さえるくの詞のあしくいとよしまうしたをと志詞なとや
内侍と宮家なり白宮ハいひなり詞へておほ人ハさひなり
ねすとや
いとをかしう思さるゝ人へゆかうさひかうやうもあしくぬかうれ
しるも本宮れしとのえ給はせしゆかひかるをたまるこゝとくの
まも御目しの詞なもてられきはりへりをるともあけきにた
宮ゐのかうや白きあの心をとらり松云給ことハおほ人此心をとかる
まや中将ふとゆゑにこ詞に宮家に曳遠（ヒキタガヘ）なるをいとお
しきさと云歎
まきしの清心をひくなかりしやむへくもあしくを
きる家なるさ流在てし此本のれたる白宮のをもこともすのきし
やさえるとはなりし給とや

あいりのうへの清あり内さふるしとて内ゆきもしも見えすもしまつり
おひさのえそくくるとを見えもしさき詞にもよるゝと心のうく〳〵かは
しも源さみたく〳〵あるとさいとみかうらめまにて行てうひ〳〵
志のひろくるおほく　宮是此包あて白宮ハ宮家なり
御ちるをとなりて見にゆくゆき花もこそくゆきのすし
色るさも〳〵見えなりあかり〳〵あまくり此好色のへはすそうひかれ
江あまくさ流をもいかなくとこ葉しつるとや
八宮の那家なもと清らころさしあいさうてしとしきつま
ふてあるをさ給ふきのましまちかき此内心の清ういくしさなると
ものくしかくはまいりくへれ　まハ桐壺乃後ハ帝八番め此御中務卿
弁　えるかくまのしましけ宇治まもし女御をや
宇治うせちまい〳〵れ家の那家乃第推本此王子を宮子時
めのまをとてうちもゑうえけらまいりてありうさ詞ふとあり

橘姫すハ一家あり惟仁君の母也ありまし混乱を成
出給ひさしきて此国の内家ハ惟喬君と同時也ならぬ
くりしをは何をと
まめやかに由来りしきこしめされと　白宮乃の給ことハま
ことあらしくも思縁々なるやらめきれのむといふり給ふ
乃みくもとえにや
かくしふなれたるとに忠ひく　白宮乃愁の給ふ文
とれ来みてや
母君そこさまにはりしりたしやのもの給ふ　山宮君
せうしするもあるを高給とやさうしやらす宮君とも
どうさてうしこそそにし給とのんすや
河古
はりしたふ貴の人まてはしれとのとやく来給と我様りぬる